



『虫』と  
愛すべき  
迷宮での日常4



著 熟練紳士

せりな  
**瀬里奈**

センチネルという  
蟻のモンスター。  
レイアの育ての親で、  
元日本人。

**アリス**

ナリサの同期。  
縁故採用されており、  
世間知らず。

**ナリサ**

「ネームレス」ギルドの  
新人受付嬢。  
実家は大家族。

**マーガレット**

「ネームレス」  
ギルドの受付嬢。  
しばしばその美貌で  
男を惑わせ、  
危険な仕事を無理やり  
押しつけている。

**ミルア&イヤレス**

「ウルオール」で「至宝の双子」と  
呼ばれる男の娘。  
レイアの義弟であり、  
かなりのトラブルメーカー。

**レイア**

世界でただ一人しかいない  
「蟲」の魔法の使い手。凄腕な上に、  
性格は鬼畜外道のため、  
周囲から非常に恐れられている。

**主な登場人物**

Daily life in the labyrinth and lovely "INSECT"



## 1 慈善活動（一）

ガイウス皇帝陛下から賜<sup>たまわ</sup>ったこのレイアの新領地は、『神聖エルモア帝国』が誇る未開の地!! モンスター蔓延<sup>はびこ</sup>る場所で、帝国臣民の数も圧倒的に少ない僻<sup>へき</sup>地!! 税収も国内の領地では、間違はなく最底辺!! と、これでもかと言うほどの場所だ。

そんな場所へ移住することになるので着々と準備を進めている。しかし、左遷の一報が世間に出回ったときは大変だったな。ガイウス皇帝陛下と私の仲は、帝国臣民も知っている。それなのに、汚職摘発をやりすぎたことによる左遷だ。

だが、ゴリフターズは移住場所を見て、ガイウス皇帝陛下の心の内を読み取ってくれた。おかげで、『ウルオール』と衝突もなく事が進んだ。だが、表向きには抗議<sup>おとな</sup>を行っている。貴族たちや帝国臣民向けのパフォーマンスは大事だからね。

そして今まで住んでいた場所は、ガイウス皇帝陛下の直轄地に変わる。本邸は、ガイウス皇帝陛下の別荘としてご利用していただこう。孤児たちの処遇は迷うが、第一孤児院の者だけ連れていくかな。他の者たちは、やっと農業が板についてきたのだ。これからガイウス皇帝陛下の財布として

しっかりと働いていただきたい。

雇っていたスパイのメイドたちには、アイハザード伯爵家に出向させる。移住先の領地は規模から考えても、仕事量は今までと比較して三割にも満たないだろう。よって、長年雇っているベレスと執務を覚えた蟲たちがいれば、領地運営に支障はでない。

だが、私が後見人を務めることになっている伯爵領は、今と同じ水準を維持しなければならぬ。それなりに力を入れてやる必要があるだろう。なにせ、伯爵家にまともな人間はもう一人も残っていないから。当主も私の蟲が操っているわけだし。

『ネームレス』ギルド本部で軽食を食べているとき、妙な視線を感じた。具体的には、壁際に立つて募金活動とかいう詐欺<sup>さぎ</sup>紛<sup>まが</sup>いなことをしている十代前半未満の子供たちからだ。

「恵まれない人たちへの募金活動にご協力お願いいたします〜」

「飯がまずくなる」

やはり、この場にいる全員を代表して、紳士であるこの私が『ネームレス』ギルド本部の連中に対して抗議する必要がある。そうそうに席を立つて、マーガレット嬢がいる受付まで移動した。

「レイア様、珍しいですね。自ら受付に来ていただけるなんて」

私好みの依頼がなく、マーガレット嬢がろくでもない依頼ばかり持ってくるから、受付に足を運ぶ機会が少ないことを理解して言っているのだろう。酷いものだ。ギルドの怠慢<sup>たいまん</sup>で依頼がないのに、

私が悪いみたいに聞こえる。

「一言文句を言いに来た。マーガレット嬢、なんのつもりかは知らないが、早くあの集団を退場させた方がよい」

「ギルドが運営している孤児院の子供たちですね。一応、ギルド長の許可も取っていますが、何か問題を起しましたか？」

問題を起しましたかとか……今現在、起していることになぜ気がつかない。

募金活動という性質を少し考えてみれば、自ずと解答が出ると思うのだが、教養あるマーガレット嬢ですら、その考えに至らないとは。

「ギルドが許可を出しているとはね。ということは、ギルドもついに本性を露わにしはじめたか。逃げ隠れもせず、こんな真昼間から詐欺<sup>さぎ</sup>を許容するなんて、嘆<sup>なげ</sup>かわしい」

「詐欺<sup>さぎ</sup>っていくらなんでも」

「良いかね、マーガレット嬢。あの場で一日立つて声をあげて募金活動に励むより、真面目<sup>まじめ</sup>に働いた方が稼<sup>かせ</sup>げるに決まっているだろう。引率の大人も含めて十五人もいるんだ。一人当たり時給五百セルで計算しても、一時間で七千五百セル。十時間働けば七万五千セルにもなる」

丸一日、あそこで時間を無駄にしたとしても、七万五千セル集まるとも思えない。要するに、冒険者が命懸けで稼<sup>かせ</sup>いだお金を、同情心に訴えて合法的に掠<sup>かす</sup>め取ろうという算段だ。

何も、募金活動自体をするなど言っているわけではない。騙<sup>だま</sup>される方が悪いのは当然。だが、公然<sup>さき</sup>の詐欺<sup>さぎ</sup>を許容するギルドもどうかと思う。しかも、手の込んだことに、最初から募金箱にはいくらお金が入れられている。

そのため『この場にいるたくさんの方に協力いただけておりますので、まだ募金をされていない方もよろしく願います』という雰囲気<sup>ふんいき</sup>を出している。

その証拠に!! 蟲を使つて調べさせたのだが、今日募金箱に入れられた金額と募金箱の中身は一致していない。本日が募金初日らしいので、前日のものが残っていたわけでもない。

「レイア様の仰<sup>おつや</sup>ることも一理ありますが、あんな子供ができる仕事なんてありませんよ」

「何を言っているのだ、マーガレット嬢。この私が何歳から冒険者をやっていると知っている。歩合制の依頼があるだろう。子供の頃の私でもできたのだ、当時の私より歳を食っている子供ができないはずがあるまい」

幸い引率の大人もいるのだから、充分働けるだろう。高級品であるハチミツの採集依頼など、的<sup>まと</sup>を絞<sup>しぼ</sup>れば十分に儲けることが可能。

「レイア様の昔を私は知りませんが、なんとも言えませんが……レイア様と同じことをするのは無理だと思っています」

「ならば、娼館<sup>やうかん</sup>でも斡旋<sup>あつせん</sup>しておけ。特殊な趣味の連中も多いから、良い値段で雇ってもらえるだろう

う。本当にお金に困っているなら喜んでもらえるはずだ。もし、これで喜ばないのならば、辛いことは嫌だが金だけ欲しいという、クソツタレな精神の持ち主ということになる。子供の頃からの嫉<sup>しほ</sup>は大事だ。お金を稼<sup>かせ</sup>ぐのは辛いことが伴うという経験を積ませるのも、大人の仕事だと思うが」  
まったく、なぜこの私が受付嬢に対して世間の常識を説いてやらねばならないのだ。

私以外にも、募金活動を快く思っていない連中はいる。現に、食事をしている席に近づき募金を強要する子供までいる。それを止めようもしない引率者は、まさに悪徳金融業者も真つ青だ。

「分かりました。とりあえずは、快く思われていない方もいらつしやるということなので、ギルド本部の外で活動をしていただきます。それならば、よろしいでしょうか?」

「落しどころだね」

さすがは、マーガレット嬢。ギルド本部の外ならば許容範囲だ。外なら、依頼書を探したり、食事をとるにしても、邪魔にはならない。



今まで、ギルド孤児院の連中が、ギルド本部で募金活動することはなかった。

ここ最近になって、ギルド孤児院を取り纏<sup>まと</sup>めているロンド・グエンダル（中身はもう私の蟲だ

が)の方針が変わって、補助金が大幅に縮小されたのが原因だ。『孤児院の運営は、その国に所属する貴族の務めであり、本来ギルドが行うべきことではない』と明言させている。

世間一般では、先日『神聖エルモア帝国』『ウルオール』『聖クライム教団』で行われた粛清に対する報復だと言われている。なぜなら、これまでは貴族の責務をギルドが一部代行していたからだ。つまり、一部ではあっても、コネと金を失ったのである。

もつとも今回の孤児院の一件は、私が裏から指示を出している。『神聖エルモア帝国』『ウルオール』『聖クライム教団』にあるギルドの孤児院を全てぶち壊す予定だ。

「マーガレット嬢、これから忙しくなるので、適当な依頼を消化して小銭を稼いでから領地に帰ろうと思う。何か、おすすめては？」

「おすすめの依頼をご提示する前に、少しお伺いしたいことがあるんですが、よろしいですか？」  
マーガレット嬢の顔がいつになく笑顔だ。こういうときは、間違いないくらいでもないことにつながる相場が決まっている。

「答えられる範囲で答えよう。なんでも聞くと良い。ここ最近では機嫌が良いから、素直に答えよう」  
「ガイウス皇帝陛下からの処罰で辺境へ左遷となるのに、不思議ですね。先日、義姉さんが『ネームレス』に来たのはご存じですか？」

「当然だ。ギルドの職員寮の前でマーガレット嬢が待ちぼうけにならないように、蟲を派遣してお

見合いが中止になった旨を報告したであろう」

紳士たる者、女性を待たせるわけにはいかないからね。常識的な配慮である。

「では、先日発売された『受付嬢Mの秘密』という書物については？」

「無論、知っている。私の蟲たちが見聞きしたことを蟲たちが綴った書籍だ。なかなか、よくできているだろう。ガイウス皇帝陛下に頼んで著名な文筆家に脚色してもらってもいい。売れ行きは、ボチボチだな」

原案には、一郎を筆頭に幻想蝶ちゃん、絹毛虫ちゃん、蛆蛭蟻ちゃんたちが名を連ねているのだ。そんなこと、私に聞かずとも分かるだろう。著作者のところに名前を載せているのだからね。

幻想蝶ちゃんの目標である、人と蟲が手を取り合う世界。その一つとして可愛い蟲たちが総力を合わせて書き上げた力作なのだ。お父様として、全面的に協力するのは当然である。直接の対話ではなく、まずは書物を用いて有名になることで歩み寄っていく作戦らしい。急がば回れということなのだろう。ウィス異本作家として、文筆家として、芸術家として、様々な方面からアプローチも行っている。

ちなみに、『受付嬢Mの秘密』は、先日の出来事を真実九割と嘘一割という素晴らしい配合で書き下ろした作品だ。他にも、ロンド・グエンダルから抽出した、ギルドの黒い部分やギルドの資料庫で見つけた表に出せないような出来事を綴っている。だがまだ一巻目なのだ。将来的には、十巻

程度になる予定だ。

あのウゝス異本で著名なS氏が挿絵まで描いてくれている。幅広い層への普及を狙うには必要なことだ。書籍は、やはり挿絵によって売上かなり左右されるからね。ちなみに、登場するのが蜘蛛マーガレットではなく、蟪蛄マーガレットになっているあたりはフローラ嬢への配慮だ。内容はギルド受付嬢であるM嬢がギルドの闇に立ち向かう話である。悪役を文字通り食い散らす!!

「へえ」

マーガレットの眉間がピクピクしている。何やら不機嫌そう。女性の目というやつなのだろうか。嫌だ、ギルドの受付嬢たる者がそんなことを態度で示すようになっては。

「で、用件はそれだけか」

「レイア様、そこまでご存じなら、私に何か言うべきことがあるんじゃないですか？」

言うべきことか。心当たりがたくさんありすぎて困るね。だが、一番言いたいのは……

「マーガレット嬢。君は、君自身が思うより敵が多い。敵を作るのは構わないが、せめて周りに、具体的にはフローラ嬢には、迷惑をかけないようにしてくれ」

マーガレット嬢のお見合いのせいで、フローラ嬢の身に危険が及んだのだ。私が偶然にもあの場になければどんなことになっていたか、想像もしたくない。人権無視上等のギルド幹部たちに捕まったフローラ嬢の末路など考えたくもない。

「レイア様、本当は分かった上で仰っていますよね？ 絶対にそうですよ？ 私をおちよくっていますよね？ お見合いの件がどうしても腑に落ちなかったので、先日、実家に帰ってみましたよ」

「何が言いたいか見当もつかない。だが、愚痴くらいは聞いてやろう。少なくともマーガレット嬢よりかは人生経験を積んでいると自負している。人生のアドバイスが欲しければ、ランチでもご馳走していただく」

「実家に帰って義姉さんと顔を合わせたら真っ青な顔をされて『ごめんなさい。マーガレット。受け入れるまでもう少し時間をちょうだい』と言われました。それっきり、義姉さんと一言も会話せず帰ってきましたよ。何やら腫れ物を扱うようにされて居心地が悪かったんですからね」

「それは大変だったね。一体、何をやらかしたんだい？ あまり、フローラ嬢に心労をかける行為は慎んでいただきたいね」

こういう風に女性が聞いて欲しいという思いを察して、話の腰を折らずに会話を盛り上げるのも紳士の務めであろう。まったく、こちらは暇ではないというのにね。

「するわけないでしょう!! 年に何度かしか会わないんだから、迷惑をかけるはずがないでしょう!!」

「まあ、迷惑をかけていないと本人は思っていますが、相手が迷惑を感じている場合もある。気にす

るな。フローラ嬢のことだから、何か思うところがあるのだろう。時間が経てば受け入れてもらえるはずだ。で、依頼は？」

どうでもいいから、早く依頼を幹旋<sup>あつせん</sup>して欲しいものだ。仕事のせいで色々と鬱憤<sup>うつげん</sup>が溜<sup>た</sup>まっているのは分かる。だが職務は、真面目<sup>まじめ</sup>にこなして欲しい。

それにしても、マーガレット嬢が一向にその素振りすら見せようとしない。ここまでマーガレット嬢が不機嫌な理由が理解できない。

はっ!! そうかそういうことか。

金の匂<sup>にお</sup>いに敏感なマーガレット嬢だ。おそらく、この私がロンド・グエンダルと殺し合う前にお土産<sup>みやげ</sup>をあげてもいいと思ったことを第六感で察したのだろう。これは、お土産<sup>みやげ</sup>の催促で間違いない。この私も、色々と各方面への対応で忙しかったせいで、お土産<sup>みやげ</sup>の件をすっかり忘れていたね。

確か、ロンド・グエンダルから押収した私財に、オリハルコン製の饅頭<sup>まんじゅう</sup>があつたな。一個あたり一キロもある饅頭<sup>まんじゅう</sup>が十二個も入った、いかにも賄賂<sup>わいろ</sup>用と言わんばかりの品物だった。光りものが大好きであろうマーガレット嬢だから、問題あるまい。

すぐに蟲たちに指示を出して、倉庫からオリハルコン饅頭<sup>まんじゅう</sup>を持つてこさせた。

「何を苛立<sup>いらだ</sup>っているか知らないが、とりあえず土産<sup>みやげ</sup>があつたのを忘れていた。とある場所からの土産<sup>みやげ</sup>だ。饅頭<sup>まんじゅう</sup>だが気に入ってもらえるだろう。受け取れ」

「饅頭<sup>まんじゅう</sup>? レイア様、私はですね」

マーガレット嬢が蓋を開けた瞬間、目が点になった。

オリハルコン製の饅頭<sup>まんじゅう</sup>だ。貴金属が大好きマーガレット嬢のことだから、すぐにいくらになるか計算したのだろう。先程までの態度が軟化<sup>なんか</sup>して、気味の悪い笑みまで浮かべている。いくら、私しか見ていないからって、人様に見せられるような顔じゃないね。

無理もない。軽く見積もっても十億セルだ。高給取りの受付嬢とて、生涯を通じて稼<sup>かせ</sup>げるような額ではない。

「で、マーガレット嬢。依頼は？」

「こんなに良いお土産<sup>みやげ</sup>があるのでしたら、先に出していただければ良かったのに。依頼ですか? レイア様向けの良いのがございますよ」

すぐに、饅頭<sup>まんじゅう</sup>をしまっている。素晴らしい手のひら返しの早さだ。というか、それほどの価格のお土産<sup>みやげ</sup>を当然のように受け取るマーガレット嬢の心構えも素晴らしい。なんの警戒心すらなく受け取ったよ。別に構わんがね。

大事なことだが……その饅頭<sup>まんじゅう</sup>には、小さくグエンダル家の家紋が刻まれている。売る場合には、十分注意した方がよい。どこかで足がつくと凄まじい面倒事に巻き込まれるぞ。

「報酬<sup>ほうしゅう</sup>と内容は？」



「依頼主は、私たちギルド。依頼内容は、ゴミ掃除ですよ。報酬は三千万セルになります」

ゴミ掃除。なるほど、先程そこに立っていた連中を掃除しろということか。だから、ギルドの外へと誘導するのも快諾したのか。ギルド本部を汚さないために……さすがの手際だ。

狩場まで十メートル程度。作業終了までの時間三秒前後。報酬額三千万セル。本当に良い依頼だな。なぜ、そんな依頼が残っているか謎すぎるくらいに。きっと、お得意様用の依頼なのだろう。

いつもこうだと嬉しいのだね。

「本当に良い依頼だな。すぐに、表の連中を掃除してくる。金はすぐ用意しておけ」

「えっ!？」

マーガレット嬢が驚いた顔をしている。

何をそんなに驚くのだろうか。マーガレット自身がギルド本部を汚さないために外に追い出すまでのお膳立て<sup>ぜんだて</sup>をしておいて、今更何を言う。

「梱<sup>く</sup>んだ服を、離してもらえないかね？ 仕事ができないのだね」

「いえいえいえ!! レイア様が盛大な思い違いをしている気がしましたので……ゴミ掃除をする場所<sup>ばしょ</sup>は、迷宮上層です」

迷宮上層!? そこで活動する者は少なくとも、多くの人<sup>ひと</sup>がたむろする『モロド樹海』で最高の人口密度の場所だ。そんな場所でゴミ掃除なんて!! どれだけ、私に掃除<sup>そうじ</sup>をさせる気だ。

「ゴミの基準は？」

「こちらが似顔絵になっております。ここ最近、迷宮上層から帰還できない者たちが増えてきており、ギルドが独自に調査した結果、その似顔絵に描かれている男女含めて三名の者が潰<sup>つぶ</sup>して回っていることが分かりました」

「迷宮内部でのいざござには、不干渉<sup>ふかんしょう</sup>が基本方針ではなかったのかね？ 自己責任……確か、そのはずだが」

「レイア様の仰<sup>おつや</sup>る通りです。しかし、ギルドとしても、育つ前の雛<sup>ひな</sup>を大量に殺されてしまつては困るんです。ちゃんと、卵を産めなくなった頃合で殺されるのでしたら歓迎するのですがね」

相変わらず、酷い組織<sup>そくし</sup>だな。ギルド上層部もそうだが、末端にまでその精神が移ってきている気がする。

しかし、似顔絵まで用意できているのに犯人確保の至っていないのはおかしい。迷宮上層にいることさえ分かっているのなら、ギルド子飼いの犬を送り込むなり、迷宮から出てきたところを数にものを言わせて潰<sup>つぶ</sup>せばいい。それをしないということは……この依頼には裏があるということだ!! 裏まで読み切つてこそ紳士であらう。

「引き受けた。上層を風潰<sup>ふうつぶ</sup>しにしよう」

「本当に分かっていますか？ いつものような勘違<sup>かんちが</sup>いは嫌ですよ」

いつものようなとは酷い。私はいつだって真剣に取り組んで、最高の成果を持ち帰っているではないか。だから、今回も安心してほしいものだ。

実に平凡な似顔絵だ。十人いれば五人が似ているほどのテンプレートな顔をしている。要するに、私の基準でこの誰にでも似ているような顔付きの男女を皆殺しにして欲しいという依頼なのだろう。男も女も少し化粧や変装をすればこんな顔になるしね。

大量に掃除することになる割に報酬額が微妙だが、良いだろう。領地移転など色々あつて、しばらく『ネームレス』を離れる。本件も後輩育成として頑張つてやろう。後輩を育てるのも紳士の務めだからね。

「大船に乗ったつもりでいると良い。盛大に、掃除してきてあげよう」

「……盛大に？」

サービス精神溢れすぎかもしれないが、たまには良いだろう。

## 2 慈善活動（二）

迷宮へと向かおうとギルド本部を出た瞬間、あろうことか孤児たちに泥を投げつけられた。当然、

避けることなど容易かつたが……子供たちにも言い分があるだろうと思い、甘んじて受けた。己の命を懸けても言いたいことがあるのだろう。それを聞いてあげるのも貴族の務めだ。

その様子を見ていた受付嬢たちの顔は、面白い。

「で、子供たちよ。人様にいきなり泥を投げつけるのはどうかと思うぞ。一応、言い分だけは聞いておこう」

「何も悪いことなんてしてないのに、なんで中から追い出すんだよ!! 聞いてたんだぞ!! お前がお姉ちゃんたちに追い出させて言っているのを!!」

何を言い出すかと思えば、そんな当たり前のことを。聞こえるように言ったのだから当然だろう。それで聞かえないというのなら、耳が悪いとしか言えない。

しかし、教育が行き届いていない子供たちだな。私が運営していた第一孤児院の連中なんて、同じ歳でも遥かにできた子供だったぞ。

私が運営する孤児院は、恐怖で従順にしていることは否定しない。だが、そいつらは領民からの税収や私財で養っているのだ。将来的に、与えたものの以上の対価を返してもらわないといけないから、それ相応の教育を行っている。読み書き、四則演算、家事全般、農業に関する知識などを、理解するまで何度でも繰り返し教える。

しかし、ギルド運営の孤児院はそういったことがない。ただ、育てて出荷するだけの機関だ。優

秀な者がいれば、就職先としてギルドが斡旋<sup>あつせん</sup>されることもあるだろう。だが、基本的に一定年齢で放逐<sup>ほうちく</sup>されるみたいだしな。

「申し訳ありません、冒険者様!! この子には、私がキツク言っておきます。どうか、子供がやったことだと思っ、お許しを」

引率者の女性職員が頭を下げてきたが……何を勘違いしているのだろうか。

子供がやったことだから許せと!? アホとしか思えない意見だ。考えて欲しい。心も体も未成熟の子供が、『神聖エルモア帝国』の大貴族であり、圧倒的な善政を行い国家に多大な貢献<sup>こうけん</sup>をしているこの私に対して、泥<sup>どろ</sup>を投げつけてきたのだ。

もし、大人になって身も心も成熟したらどんな犯罪を起こすか想像もつかない!! 下手したらガイウス皇帝陛下を殺す駒<sup>こま</sup>にもなるかもしれない。

そんな危険人物をなぜ許せというのか、ギルド運営の孤児院はどうなっているのだ。

はっ!!

そういうことか。引率者の本当の目的は、募金活動などではなく、不要な者を合法的に破棄することなのか。きつと、私のような紳士ならば、心の内を読んでうまい具合に処理してくれると、そんな淡い期待を抱いているにちがいない!!

そうでもなければ、こんな人様にご迷惑をかける子供を『ネームレス』まで連れてくるはずもな

い。孤児院への援助金が減ったこの時期に、孤児たちの選別に入っただろう。補助金が減ったなら子供も減らそうという方法に出たのか。

なんという計画性。この私ですら危うく見抜けないところだった。

「本当は、こんなサービスはしないのだが……私の機嫌が良いことに感謝しろ」

暗殺用に開発した蚊<sup>か</sup>——モンスター<sup>モンスター</sup>の血や肉は、人体に非常に有害だ。ならば、その有害な血を人間の血管に直接混入させたらどうなるだろうか。数時間とせず、冒険者ですら苦しみもがいて死ぬのだ。子供ならば、効果抜群であろう。

一匹の蚊が、私に泥<sup>どろ</sup>を投げつけた子供たちの足を刺した。

「ありがとうございます。せめて、クリーニング代を——」

社交辞令の演技までこなすのか、ギルド孤児院の引率者はできる奴だな。

だが、私の冒険用の衣服がいくらか分かって言っているのだろうか。モンスター素材とか、絹毛虫ちゃんなどの、どこにも生息していない私が作った蟲たちの希少な素材を使い、丁寧<sup>ていねい</sup>に編み上げた一品なのだ。そんなお洋服をクリーニングしてくれるお店などない!! うちでは高価なものは取り扱えません、とお断りしか受けたことがない。だから、いつも私が手洗いしている。

「そうだな。私も大人だから迷惑料については目をつぶろう。汚れが染み込んでしまっているのでクリーニングでも落ちないね。この服は大変貴重な素材を使っているから、一億セルで手を打

とう」

「い、一億!! たかが衣服でそんな」

紳士淑女たちの衣服のお値段としてはこのくらい当然である。命を守る最終防衛ラインでもあるのだ。その程度のお金をかけないでどうする。

「はあ、最初から払う気がないなら、クリーニング代とか言わないでいただきたいね。適正価格なのだがね。疑うのならば、受付嬢にでも聞いてみるといい」

だが、もう払わないでも構わない。死んで詫びてもらったことになったからさ。いくら私でも、死人にムチを打つ真似はしない。しっかり詫びを受け取った。

ボタンと子供が倒れた。顔は青ざめており、吐血までしている。良い具合に毒が回っているようだ。もう助からん。

「すみません。子供が」

「泥のことなら気にするな、終わったことだ。では、仕事があるのでこれで失礼させてもらおう」

子供が首元を掻き毟っているのを心配そうに見守る引率者。主演女優賞を取れるくらいの演技である。内心、これで一人分の食いつ持が減ったわ。次は、誰を処理しようかしらと思っているだろう。

怖いね。

私ほどではないが、ギルド本部にも紳士や紳士の可能性を秘めた冒険者がいるから、引率者の心を読んで残りの子供たちの処分についても、さりげなく手助けをしてくれるだろう。私が全て処理してあげても良いけど、他の者たちの出番を取るのにはよろしくないからね。

潜在的な危険人物の排除と資金難のギルド孤児院の双方を無償で助けるあたり、紳士にしかせない偉業であろう。



『モロド樹海』一層に降り立ち、仕事を始めることにした。掃除をするときは、上から順番にやるのが正しい手順だ。

ゴミという名の品格のない冒険者たちを掃除して欲しいなんて……まったく、ギルドも思い切ったことをやるものだ。

私のお眼鏡に適う冒険者など少ないというのに。

本気でやったら、『ネームレス』にいる冒険者の八割を殺さないといけなくなる。

だから、採点は大甘だ。

だが、私にとっても渡りに船の依頼だ。低ランクの冒険者相手ではあるが、蟲たちに戦闘経験を



積ませることができらるだろう。当然、やるからには一流らしく、証拠一つ残すべからず。

誰も気づかないうちに採点を行い、それに則り執行する。

「証拠さえ残らなければなんでもありだ。人目を避けて、確実に!! やり方は皆に任せよう。何か質問は?」

今回、影の中から出てきた蟲たちは、上層のモンスターを殺すにはあまりにも強い力を持っている。擬態化能力を二の次とし、戦闘能力に長けた蟲たちを選抜したのだ。

数千に及ぶ蟲たちが、早く広い迷宮に飛び立ちたいと私の話が終わるのを待っている。あれだね。学校の校長先生の気持ちが理解できた。そんなに、長い話をするつもりはないんだからさ、一分くらい話しても良いでしょう。

ギッギ（モンスターの対処は、どうしますか?）

「好きなだけ、食べてよろしい」

ジー（不合格の冒険者は?）

「骨一つ残さず、食べてよろしい。無論、誰にも知られずにね。第三者に目撃された場合には、第三者を確保。私が蟲を使って記憶を消そう」

ギィィ（見つけた食料は!）

「全て食べてよろしい」

食べ盛りの蟲たちは、私のオーダーに大喜びだ。

いつもと命令している内容は一緒なのだけだね。どうせ、止めても勢い余って食べてしまう。それなら、蟲たちも心置きなく食べられるように最初から命令で、食べてよしにすれば良いだけだ。

ギッギ（ソース分隊は、南の方に行ってきます）

ジッ（マヨネーズ分隊は、北の方を）

そして、私が唯一持ってきた荷物から、蟲たちが各々の好みに合った調味料を持って飛び去っていった。他にも、味噌分隊や塩分隊などが設立された。また瀬里奈さんのところから調達しないと品切れしそうだ。

それにしても、美味しそうな分隊名だ。可愛い蟲たちにぴったりである。

「では、私も動くかな」

吉報が届くまで近くを散策する。未来の後輩たちの働きでも見て回るとしよう。



徐々に下へ下へと移動した。下に向かうにつれて、結構な数のパーティーと遭遇できた。本来なら、広い『モロド樹海』で、パーティー同士が獲物を取り合うようなことはないのだが、この日は

かりは珍しく、パーティー同士で争いが発生している。

どうやら、蟲たちが頑張<sup>がんば</sup>っているおかげで、獲物が不足しているようだ。この階層で狩りをする冒険者では、私の蟲を感じすることはできないようで、モンスターが激減した理由が分からないらしい。わずかな時間で骨すら残さず平らげてしまう。残るのは、せいぜい香辛料の残り香くらいだ。そんな争いを、文字通り高台の上から見物している。

ギ（お父様、きのこが焼けました。味付けはお塩ですよね!!）

ギイイ（いやいや、ここはマヨネーズでしょう）

ジー（ソースと言いたいですけど……ここは、仲良く全部のせにしましょう!!）

蟲たちが仲良く持ってきた調味料を、きのこに全部のせしてくれる。できれば、部分ごとで綺麗に味付けを分けてくれれば良かったのだが、本当に全部のせしてきた。お父様は、子供たちの成長に涙を隠せない。多少、塩分過多ではあるが問題ない!! 可愛い蟲<sup>かわい</sup>たちが私のために用意してくれたのだ。それを食べないなどあり得ないだろう。

焼きキノコ調味料全部のせを受け取り、一口食べてみる。大丈夫だ……許容範囲の味だ。メシマズテロになるかと思ったが、食えるレベル。

「ありがたい、皆。だけど調味料は、全のせではなくて、次からは選びましょうね」

せっかく、料理の腕前を鍛<sup>きた</sup>え上げた蟲もいるのだから、アドバイスをもらうなりして欲しかった。

嬉しいことにはちがいないがね。

ムシャムシャと食事をしつつ、高みの見物を決め込んだ。眼下でモンスターを探している冒険者が苛<sup>いら</sup>立っているのがよく分かる。迷宮上層のモンスター素材なんてゴミ値だ。経費を考慮すると、相当の数を入手しないと黒字にはならないのだ。

焦<sup>あせ</sup>る気持ちも当然だ。

まだ、サポーターに当り散らすことはしていないが、時間の問題であろう。モラルの低い連中が多いのだ。きつと夜には何かしら問題を起こすと見える。



夜も更<sup>ふ</sup>け、就寝の時間になった。

夕食も食べ終わり、シャワーも浴びて、身も心もすっきりした。あとは、布団の中で朝を迎えるだけだ。新品同様のこの毛布は最高だ。そして、抱き枕の絹毛虫ちゃん。底辺冒険者たちは、この寒空の下でモンスターを警戒しつつ野宿とは、ご苦労なことだ。

不幸中の幸いは、暑い時期でないということだね。暑い時期は、食料は腐<sup>く</sup>りやすいし、水はダメになるし、汗臭いし、本当に最悪だよ。

お父様である私がベッドの中でお休みしていて、蟲たちが働いているのは若干気が引ける。だがお仕事なので、一部の蟲たちには昼間に引き続き、偵察に行かせている。夜の態度も当然採点してあげないと不公平だ。昼間の採点結果と夜の採点結果を元に執行する。昼は冒険者としての実力を夜は人としての人格を。実によく考えた採点だと思う。

それにしても、低ランクのゴミ掃除ね。私の時代にはなかったことだ。

真面目な冒険者がバカを見ない世界にしようと、ギルドが本気で重い腰を上げたのだろうか。いや、そんなわけないか。もしその通りならば、ギルドを解散させるのが一番の近道。

もしかしたら、低ランクのゴミ掃除を行ったあとは、高ランクの掃除も始まるのかな。ギルドが一番喜ぶのは、高ランク冒険者が死ぬことだ。特に、財産を倉庫に預けたまま死ぬことがよしとされている。低ランク冒険者と違い、高ランク冒険者は一癖も二癖もあるから殺すのは大変だよ。私のような者が出張れば話は別だが。

だが、現状を見て一つ言えることは——今の若い子たちが羨ましい。こうしてギルドが高ランク冒険者を使って、育つ環境を整えてくれる。私なんて何度、嫉妬から命を狙われたか分からないしかも、ギルドの手先ばかりだったからね。襲ってくる連中がね。

「低ランクたちの環境を整えるのもいいけど、稼ぎ頭の高ランク冒険者の扱いを改善して欲しいよね。奴隷じゃないんだから、安い報酬でこき使いすぎだろう」

今回の依頼だって、どれだけのゴミを掃除するか、完全に依頼を受けた側の心意気次第。一人でもいいし、一万人だっていいのだ。他の高ランク冒険者に迷惑にならないように、恥じない成果を求められている。

それで三千万セルというのは、安かった気がする。ボーナスとして、蟲たちのお腹が肥えるが、金銭面的には少々ね。

人様が気持ちよく寝ていると、こちらに向かってくる足音が聞こえてくる。近づく者は有無言わず殺せという指示はしていないので、蟲たちは私の判断を待っているのだろう。

本当に、呼んでもない厄介事を持ってこないでいただきたい。すぐに蟲が事の詳細を報告に来てくれた。こちらに逃げてきているのは女性一人。それを追いかける男性冒険者が数名ということだ。小窓を開けて外を見てみると、まっすぐにこちらに向かっている。

夜だというのに少し明かりを使いすぎたか。おまけに、小窓を開けたせいで、間違はなくこちらの位置を特定しただろうし、困ったことだ。まあ良いか。ベッドに戻り、毛布をかけ直す。

「施錠もしたし、中までは入ってこられまい」

一郎が一匹、一郎が二匹、一郎が三匹、一郎が……

ダンダンと激しく小屋の扉を叩く音が響く。狭いんだから、そんなに強く叩かなくても聞こえるって。

「開けてください!! お願いします。助けてください助けてください」

無視を決めこもうにも、扉をダンダンと叩く音がやまない。

う、うるさい!! 寝るときは誰にも邪魔されず、静かに寝るのが大好きなこの私に、喧嘩を売っているとは思えない。諦めてどこかに行かずに扉を叩きまくる根性だけは褒めてやろう。

仕方がない。この私が世間の常識というものを説いてやろう。

扉の小窓を開けると、肌着が乱れて体中に擦り傷を負った女がいた。おそらく、他の冒険者たちから逃げる際に負ったものだろう。なに、迷宮ではそういうことはよくある。

「うるさいぞ!! 今、何時だと思っている!？」

既に深夜だ。そんな時間に他人の家の扉を叩いて住人を無理やり起こすだけでなく、刃物を持つた底辺冒険者まで引き連れてくるとは、頭がおかしいとしか言えない。

「そんなことより、追われているんです!! 助けてください」

「悪いが、この小屋は一人用だ。他をあたってください」

私の睡眠をそんなこと勝手に決めるとは何様であろうか。私より偉いのだろうか。もはや、同情の余地すらない。それに、女にも告げたとおりこの小屋は一人用だ。

そんなやりとりをしていると、見える場所まで女の追っ手が迫ってきた。一体、私が何をしたいというのだ。ただ眠りたいだけなのに。仕方がない、安眠のためだ。寝巻きの上からローブを纏った一応、人前にでるのだから、最低限の身だしなみは必要であろう。扉を開けてやると、女は安堵の表情をした。

そして、首根っこを掴みあげる。

追っ手の冒険者たちが各々の得物を構えて、こちらの出方を窺っている。慣れ親しんでいる迷宮上層に、見慣れない小屋が建っているのだ。警戒しない冒険者はいないだろう。

「お前たちが雇ったサポーターか？」

「そ、そうです。だから、こちらに引き渡していただけませんか。そいつには高いカネ払っているもんで」

女は気がつかなかったようだが、冒険者の方は私のことを知っているようだ。口調がおとなしい。様子を見る限り、五人中三人が私のことを知っているようだ。ホームグランドである『モロド樹海』だと、やはり知名度はそれなりにあるようで、嬉しい限りだ。

「何が高いカネだよ!? 二束三文じゃないか。街にいる娼婦だつてもっと貰っているわよ」  
なるほど、これは女が悪いな。

この女、金は欲しいが体を売るのは嫌だというタイプか。夜のサポーターで雇われたが、土壇場



でいちゃんを言う輩がいると聞いたことがある。貰った給料分は働かないとダメだろ。

街にいる娼婦もピンキリだが……この場合は、お店で働いている娼婦のことを示しているのだろう。だとしたら、頭がどうかしているレベルだ。店で働く娼婦は、教養もある。話術などのコミュニケーションスキルが鍛えられており、お客様を楽しませることに特化した者たちだ。

だが、キサマは違う。だからこそ二束三文の値段なのだ。

「なるほど、よく分かった。受け取れ」

「えっ!! ちょっと……」

女をここまで追ってきた冒険者に投げ捨てる。

追っ手の冒険者も、素直に返してくれるとは思っていなかったようで、啞然としている。そんなに驚くことなのであるのか。どちらに非があるかは明白である。まさか、この私が女の言うことを鵜呑みにして、一方的に男性が悪いと思うような人物に思われていたとしたら残念だ。

これでも、人を見る目はあると自負している。

「あ、ああ、すまね。俺らは、これで」

リーダー格らしき男が仲間を急かす。しかし、大事なことを忘れている。

「おいおい、まさかそのまま帰るつもりなのか? こんな夜更けに迷惑をかけたんだぞ。出すべきものがあるんじゃないのかね?」

まったく、人様にご迷惑をかけたというのに、たった一言の謝罪だけで終わらそうというのだ。何を考えているのだろうか。それに、貰うものを貰っておかないと、他の冒険者に示しが付かない。

リーダー格の男がすぐさま懐から財布を取り出して、私の方に投げしてきた。

「これしか持っていない。これで見逃してくれ」

何を勘違いしているんだ。それに、こんな端金なんていらぬぞ。

「馬鹿かね、君は。なぜ、君がお金を払うのだね? 払うべきは、その女だろう? 女がここに来なければ、私に迷惑をかけることはなかった。ならば、迷惑料を払うべきは、その女だ」

当然のことを言っただけなのに、冒険者一同が顔を見合わせている。そんなに変なことを言っただろうか。今回の出来事の責任は、すべて女にある。代わりに払ってくれるならそれに越したことはないが、払いきれないだろう。

深夜割増の三割を付けて、キリよく一千万セルほどいただければこの怒りを鎮めよう。一流の紳士たる者、人を許せる心は大事だ。

「一千万セル。それだけ即金で貰えるなら、今回の一件を水に流そう」

「払えるわけじゃないでしょう!! そんな大金があつたら苦労しないわよ」

そうか、ならば仕方がない。

「なら決まりだ」

貧乏臭いと思っていたが、やはりこうなったか。金で助かる命であったというのに残念だ。投げ渡すときに仕込んでおいて、正解だったわ。

パチンと指を鳴らし、蟲たちに合図を送った。

「ごとおおええええ!! ぎゃあああああああああ」

女の体内から、無数の蟲たちが顔を出す。その様子を見た冒険者一同が、女から距離を取る。内臓を食い破り出てきた蟲たちは生まれたばかりで、栄養を求めて母体となった女の血肉を貪る。悲鳴がしなくなる代わりに、蟲たちの食い荒らす音が鳴り響く。

瞬く間に、何もなくなつた。

「おいで可愛い蟲たち」

ピーピ（お父様、お父様、おとうしゃま）

ギーギ（お邪魔しますーす）

蟲たちが一斉に影の中に飛び込んでいった。

「「「お、俺たちはこれで失礼します!!」」」」

「そんなに急がなくても」

悪いことなんて何一つしていないのに、全力で逃げる必要はないだろう。迷惑をかけられた者同士、親睦を深めようと、蟲出しコーヒーを入れてやろうと思ったのね。

まあ、いつか。

しかし、底辺冒険者たちも大変だな。私のように理解ある者だったから良かったけど、理解のない冒険者だった場合には、女の言うことを鵜呑みにして殺し合いに発展しかねない。これは、本格的に掃除を行う必要があるそうだ。

### 3 慈善活動（二）

昨日、寝入ってから重大な失敗に気がついてしまった。昼と夜の採点結果を元に処理を執行するのは構わない。だが、その結果パーティーメンバーに欠員が出てしまい、パーティーが全滅の危機に陥つては二流の仕事になってしまうと。

早急に、戦闘員が減ったパーティーには蟲たちを使って、陰ながらサポートするように手配した。パーティーの許容量を超える敵が来る場合には、接敵する前に、蟲がモンスターを排除する。戦闘中に死ぬ危険が発生しそうな場合にも、モンスター自体を実力排除して構わないという指示を出した。

サポーターが処理対象のパーティーには、さりげなくきのこや山菜などの食料を集めて通り道に

置くように手はずも整えた。道端に食料が落ちてゐるなんて怪しき拔群だが、仕方があるまい。これで、完璧の布陣である。

それから、順々に掃除をしていき、八層に到達時点で、出したゴミの数は七十人を超えた。この数ならば、マーガレット嬢の期待にも応えられるだろう。採点を少し厳しくすれば、軽く百人を超えるのだが、削りすぎるとギルドの収益に問題が生じるだろうと考えて、配慮してあげた。

微妙な力加減が実に難しい。

本当に、こんな曖昧な依頼を受けてしまった私が情けない。だが、紳士として恥じない成果を出さないといけない。私の成果が高ランク冒険者全体の評価に響く可能性もあるから、細心の注意が必要だ。

「ふむ、昨日のゴミは六名か。当然というべきか、下に潜るほどゴミの数は少ないな。で、蛆虫輸ちゃん、検死の結果は？」

しかし、ゴミたちは本当のゴミみたいな連中ばかりだ。働いているフリをしている者、素材をくすねている者、サポーターとしての仕事である周囲警戒を怠ってパーティーを窮地に追いやった者、夜間の警戒任務を蔑ろにして男女で合体する者たちなど、困った連中が多い。

今現在は、蟲たちが偶然発見した死体を調べている。本来なら気にすることでもないのだが、

マーガレット嬢からの依頼がダブルブッキングしているのではないかと思い、念には念を入れて確認している。

モモナー（あ、お父様。検死解剖が完了いたしました。死亡時刻は、三日前。死因は、急所を一突きです。凶器は、レイピアのような鋭利なものだと想定されます。他の死体については、既に原型すら残っていないのでなんと……）

「十分な成果だ。死亡して三日も経過しているのだ。多少なりとも原型が残っていたこと自体が奇跡に近い。しかし、三日か」

私が依頼を受注したタイミングから考えても、ダブルブッキングの線は薄いな。よくよく考えれば、私に依頼を斡旋したのはマーガレット嬢だ。人格面はともかく、仕事の上ではギルドの中でも相当のやり手であるから、ダブルブッキングするようなヘマはしないだろう。

となれば、善意でゴミ掃除をしている者がいるか、もしくは低ランク冒険者狩りを楽しんでいる者がいるかのどちらかだ。前者であれば嬉しいのだが、そんな奇特な人物は少ないだろうね。後者の場合は、間違いない装備狙い。低ランク冒険者とはいえ、装備にお金をかけている者は多い。そのため、依頼報酬やモンスター素材を売却するより利益が出る。

金になりそうな遺留品が残っていないから、後者だろうね。

おまけに、死体の年齢は三十歳を超えている。そのような熟練の低ランク冒険者が、こんな無様

な死に様を晒すはずがない。この手の輩は、慣れた狩場でも常に死なないことを最優先に考えて行動している。

だが、それでも死んでいるということは、圧倒的な実力差があったと考えるのが妥当であろう。「無理に探し出す必要もあるまい。問題がある冒険者なら、こちらの採点に引っかかるはずだ」

ありえないと思うが、第三の可能性もある。死体となった冒険者に不慮の事故が起こったとかね。例えば、高ランク冒険者に喧嘩を売ったとか。

ギイ（お父様!! 宝箱を発見しました）

大急ぎで走ってきたと思えば、素晴らしい吉報を持ってきてくれた。上層とはいえ、宝箱はロマンが詰まっっていて、何度開けても楽しい!! 下層の宝箱と比べれば、中身がショボイのは仕方がない。しかし、それでも金銀財宝は望める。中身次第だが、安い報酬の足しにはなるだろう。

「偉いぞ!! よしよし」

抱きかかえて、頭を撫でてあげると、実に嬉しそうな顔をする。本当に可愛い蟲たちだ。

ギッギ（もっと撫でて!! もっともっと!!）

他の蟲たちの視線が痛い。これは、全員を撫で回してあげなければいけないね。本日の午後の業務は決まった。

「みんなも後で撫でてあげるからね。まずは、宝箱を開けに行こうか」



宝箱は、良いものだ。冒険者のロマンの塊である。罨かもしれないが、開けるという選択肢以外選ぶことはできない。開けなければ、冒険者として終わっている。そう思わせるほどの魅力が詰まっているのだ。

もっとも、私は人が少ない下層で活動していることと、蟲たちを使った人海戦術で、毎月何回も開けているんだけどね!!

「だが、罨だと面倒だ。いつも通り頼むよ」

影から蟲たちが何匹か這い上がってきた。

宝箱は意地悪いことに、生きた者しか開けることができないのだ。昔はそれが分からなくて、棒や紐などを使って安全に開けようと、様々な方法を試みたことがあった。どれも失敗した。

だが、あるとき気がついてしまったのだ。

蟲たちを使って開けさせればいいのだ。同じ生物であるなら、別に人に拘る必要はない。事実、このやり方は成功した。しかし、腑に落ちない点が一つだけあった。なぜ、モンスターたちが迷宮にある宝箱を開けないのかという点だ。

宝箱には、金銀財宝以外に食料も入っていることがある。事実、ゴリフターズと迷宮に来たときはバナナなんて珍品が出てきたくらいだ。バナナの種は、瀬里奈ハイヴに送って蟲たちによって大切に育てられている。きっと、蛆蛄蟪ちゃんが全力で品種改良したのだから、じきに出荷できるレベルになるだろう。

だから、蟲たちになぜ宝箱を開けないのかを聞いてみた。そうしたら、宝箱という存在をそもそも認識できなかったと言われた。『蟲』の魔法で私の配下に加わることで、初めて宝箱という存在を認識できたらしい。これは、驚愕すべき事実であった。

そのうち、瀬里奈さんが宝箱を認識できるか本気で確かめてみたい。新しい発見がありそうだ。ジッジ（お父様のため、今日も宝箱を解除!! 解除!! 食べ物が良いな）

ギッ（金銀財宝の方が良いですよ。後で、ご馳走を買ってもらえますので。では、オープン!!）蟲たちが宝箱を開けると、中からはルビーが出てきた。上層にしては、かなりアタリの部類に入る。これは、『ネームレス』に戻ってから換金するとしてよう。

「期待に添えてあげましょう。『ネームレス』に帰ったらご馳走だね」

だがその前に、ゴミ掃除の必要がありそうだ。

先ほどから、木々の陰から様子を見ている者たちがいる。何もしてこないのが無視していたが……宝箱が開けられるのを待っていたのだろう。罠の可能性を考慮すれば第三者に開けさせて中

身を強奪するのは、宝箱から安全にものを取り出す方法の一つである。

第三者を待つような地道なやり口を採るのは、相当粘り強い精神力の持ち主と言える。

「はいはい。その人、痛い目を見たくなかったら、手に持っているルビーをおとなくこちらに渡してもらおうか」

「ついでに、装備品も全てこちらに渡してもらいましょう。死ぬよりマシでしょう」

知り合いではないはずなのだが、知っているような気がする。どこにでもいそうな平凡な顔つきをした男女二人組が、私に武器を向けて武装解除、並びにルビーを寄越せと言ってきた。喉元まできているのだが……やはり思い出せない。

「こんな安物のために、そんな行為を？」

宝石の一種であるルビーとはいえ、命と天秤にかけるものかと言われるばそうでもない。宝石鑑定の知識はないが、今までの経験からおそらく二百万セル程度だろう。

「宝石の目利きもできねーのか。まあ、仕方ねーよな。こんな底辺のたまり場で一人コソコソ働いている奴じゃな。そのルビー、百五十万セルはかたいな」

「いやー、助かったわ。罠だと面倒だったから、適当なパーティー捕まえて開けさせようと思っていたら、ノコノコ一人で来てくれるんだから、手間が省けたわ。で、フードの人、宝箱に触れずに開ける方法を教えてくれたら、下着の一枚くらいは残してあげるわよ」



蟲たちが開けたのを認識できていないのか。

装備品や筋肉のつき方、雰囲気から察するに、ランクCもしくはランクBだろうに、練度が足りてないね。経験も不足している見える。こんなことをせず、真面目に命を天秤にかけて冒険に勤しめば、もっと稼げただろうに、惜しい。

「なるほど、理解した。では、死ぬ前に一つ教えてもらえないか。三日ほど前にそのレイピアで冒険者を殺した記憶は？」

「ええ、ありますわよ。モンスターを狩るより割のいい稼ぎになるからね。迷宮での採め事は自己責任。あの冒険者たちは、装備の無償提供を拒みましたからね。仕方なかったんです。で、あなたはどうしますか？ 運がよければ、装備なしでも生きて出られますわよ」

迷宮での採め事は自己責任、その通りだ。ならば、お前たちに対してこれから行われる行為も、自己責任で間違いないかな。

ギギ（お父様を相手に恐喝行為……減点一億点!! 執行対象です）

「ならば、私は幸運の持ち主だろうね。生きて出られるのだから」

フードを取ったが、相手の反応は変わらない。このレベルの冒険者相手に顔が売れていないとも考えにくいから、余所者か。何か問題を起こして元の場所にいらなくなつて、冒険者の出入りの多い『ネームレス』にやつて来た口かな。

「随分な自信だな。それでも、俺たちは『ミスタリア』じゃ名前が売れた冒険者なんだぜ」

「ちよつと問題起こして追われる身になつたけどね」

『ミスタリア』って、確か地理的には『神聖エルモア帝国』の横にある弱小国だな。毎年、事あるごとに援助を懇願してくる乞食みたいな国家だった記憶がある。『神聖エルモア帝国』の血税が他国に使われるのが納得いかないので、時期を見て潰したいと思っている国の一つだ。

……あれ？ 今、追われる身とか言っていたよな。

「追われる身ということは、賞金首か？」

「その通りだ。賞金額四千万のセグリス、相方は賞金額二千五百万のメリアだ」

くっそ!! マーガレット嬢!! やりやがったな!!

二人が凄いだらうとドヤ顔をしているのを華麗にスルーして、依頼書を確認してみると、備考欄の枠口に小さな文字で『本依頼で賞金首を殺害した場合でも、賞金は発生しません』とご丁寧に書かれている。ギルドは、こいつらの賞金額をそのまま懐に収めて、その一部を報酬として払う気であるのがやつと分かった。しかも、この似顔絵……こいつらにも似ているじゃねーか。

ゴミ掃除に合わせて賞金首まで掃除させようって腹か……完全に私のミスだ。

依頼書をよく確認しなかった不手際、故に文句は言えない。ゴミ掃除が依頼なのだ。そのゴミが偶然賞金首であっただけなのだ。当然『ギルド』としては、備考にもしっかり書いておりますので、

ゴミ掃除の報酬は払います、賞金首の賞金は残念でしたね』と言うつもりであろう。

高価なお土産をマーガレット嬢にあげて、幹旋された依頼がこれとはね。てつきり、楽で利回りの良い依頼だと思ったが、ババを掴ませてくるとは恐ろしい手腕だ。そのうち、本当に後ろから刺されるぞ。

「やる気が抜けてきたな。で、二人組じゃないんだろう……さつさと、三人目もこちらに呼んできたらどうだ。それとも、油断させた隙を見て茂みの中から攻撃するのかな。こんな話をしている時点でたかが知れるけどね」

私を殺すなら、知覚範囲外から一方的なアウトレンジ攻撃をするか、桁違いな火力を持つてくらかししないと無理だというのに。こちらとしては、下らない話をしてくれたおかげで準備万全。既に、この階に放った蟲たちの七割以上がこの場に集結している。しかし、相手はそのことにまったく気づけない。

おまけに言えば、三人目はたつた今この世からいなくなった。声すら上げさせず、迅速に処理が完了した。

「それでも、そんな強気でいられるかしら!!」

レイピアの刺突で私の眼球を潰す気だろう。身体強化に加えて、レイピアの先端を『火』の魔法で焼いている。なかなか、えぐい魔法の使い方をする。

蟲たちが止めに入りそうだったが、私も働かなくては蟲たちに示しがつかないだろうと、少し頑張る。レイピアを人差し指と中指で挟むことで、威力を完全に殺してみせた。

「えっ!!」

「この程度か。お金を稼ぐのも良いが、もっと良い武器を買ったほうが良いぞ。鉄に少量のミスリルを混ぜたような安物だと、こうなる」

——はっ!!

力に物を言わせて、レイピアを見事にへし折ってやった。実は、周囲に隠れている蟲たちが、ゴミたちが喋っている間に、指向性音波を使っている。金属を振動させて、武器自体の耐久度をズタボロにしていたのだ。変身しない状態では、安物でも力でへし折るのは骨があるので、ちよつとした小ワザを用いた。

「奪ったものだからね!! 安物で当然よ!! でも、これなら」

女は、へし折れたレイピアから手を離して、背中隠し持っていたピッケルに持ち替えた。それを見て、なかなか良い武器があるじゃないかと思わず感心してしまったよ。ピッケルは良いよね。あの形状は、好きだよ。ロッククライミングで役に立つ。

ミスリル製か、壊すのは少し惜しいので貰っておこう。

「良い武器だ。貰っておこう」



「できるものならなっ!!」

女が攻撃の体勢に入るより早く手首を掴んだ。

「握力を測ったことはないが、この姿でも本気を出せば鉄すら捻<sup>ねじ</sup>ぎれる。どの程度鍛<sup>き</sup>えられているか測定してやろう」

「はやく、こいつを始末してえええ!!」

逃げ出そうとしても、ビクともしないことで、状況が理解できたようだ。自分たちより強い者に喧嘩<sup>けんか</sup>を売っているということにね。だが、もう遅い。私に掴まれる前なら仲間の援護が間に合ったかもしれないが、今更動かれてもこちらが手首を捻<sup>ねじ</sup>ぎる方が早い!!

ブズリと手首を握りつぶした。

「いやあ、あああああああー」

武器を持った手首ごと捻<sup>ねじ</sup>きつて、身体は蹴飛ばし仲間の方へと飛ばしてあげた。

「お仲間だろう。受け取るといい。あと、これもおまけだ」

仲間を助けに入ろうとした男に対して、女から奪い取ったピッケルを投げつけた。女を盾<sup>たて</sup>にしてピッケルから身を守るか、女を庇<sup>かば</sup>ってピッケルをその身で受けるか。好きな方を選ばせてやろう。美しき仲間との友情を見せてくれ。

——男は、仲間を当然のように盾<sup>たて</sup>にして、私が投げたピッケルを防いだ。盾<sup>たて</sup>にされた仲間は、見

事に脳天にピッケルが突き刺さり即死。

「このくそつたれがああああ!!」

己の命惜し<sup>お</sup>さで仲間を盾<sup>たて</sup>にして殺したのに、責任を私に転嫁<sup>てんか</sup>するのはやめて欲しい。私は、女に生き残るチャンスをくれてやった。それを、その手で殺しておいてなんて言い草だ。この理不尽さ、万死に値する!!

「ふむ、そろそろ皆揃ったね」

「こつちを見やがれ、見下してんじゃねーぞ!!」

男は、小型の丸いシールドと短剣という変わったスタイルをしていた。どうやら、暗殺とかそっち系が得意の者なのだろう。

「見下している？ おかしなことを言うね。キサマら、ゴミなど最初から眼中にないわ」

蟲たちが一斉に擬態<sup>ぎたい</sup>を解いた。空には無数の純白の蟲たちが、地上にも溢<sup>あふ</sup>れかえっており、雪景色のように美しい。迷宮でこんな光景を目にできるのだ。死ぬには最高の日だろう。

「こ、この蟲たちは!!」

「ご挨拶<sup>あいさつ</sup>が遅れましたね。レイア・アーネスト・ヴォルドー、ランクB冒険者だ。得意の魔法は『蟲』。この度は、ギルドからゴミ掃除<sup>ごみぞうじ</sup>を請け負ってきた。では、お仲間の場所へご招待してあげましょう」

ギイ（お父様、お腹減った。もう食べていい?）

ジー（同じく）

ギエギ（ちよっとだけ、さきつちよだけだから、味見してもいいよね、お父様）

だいぶ、待たせてしまったね。では、ランチタイムにしよう。

「ま、待ってく——」

「お手々を合わせて!!」

ギイー（いただきますー!!）

ジー（いただきますー!!）

ギエ（いただきますー!!）

仲間の死体を、蟲たちに投げつけるか。蟲たちが襲いかかってくるのを見て、瞬時に仲間を餌<sup>えさ</sup>にして逃げ出すとつさの判断。優秀だな。だが、どこに逃げるというのだね。既にこの場は蟲たちによって完全に包囲されているのだ。貴様には、突破口を開くほどの力もないはず。

ほほ。私から遠さかるのではなく、あえて近づいてきたか。頭の出来はマシな方だね。数の暴力といっても過言ではない蟲たちを相手にするより、司令官である私を狙ってこの難局を突破する気であるのだろう。

「ああ、言い忘れたが……そこらへんに」

「え——」

罌<sup>わな</sup>が大好きな蜘蛛<sup>くも</sup>の子が、ワイヤートラップを仕掛けているよと教えてあげようと思ったが、遅かった。見事に、スパツと良い音を立てて三等分されてしまった。

相変<sup>あへ</sup>わらず、えぐい切れ味だな。このトラップには昔、私も引つかかったからね。酷いことに仕掛けられていた場所が、四十八層の入口だったのだ。ルンルン気分で腕を振りながら移動していたら、右腕がサイコロステーキにされて、本気で焦<sup>あせ</sup>ったわ。

蛆<sup>せき</sup>蟪<sup>むし</sup>ちゃんがいなければ、隻<sup>せき</sup>腕<sup>むね</sup>になっただろう。

ギギ（やはり、男性は肉質が硬いですね。女性の方が美味<sup>おい</sup>しいかな）

ジー（いえいえ、この肉質が良いんですよ。お肉を食べているって気がするじゃありませんか。女性の肉は、油<sup>あぶら</sup>っぽいからね。あ、お醬<sup>しょう</sup>油<sup>ゆ</sup>とっていただけますか）

ギィ（お醬<sup>しょう</sup>油<sup>ゆ</sup>ね、どうぞ）

みんなのランチタイムが終わったら、こいつらが溜<sup>た</sup>め込んだ装備を回収して、次の層へと移動しよう。マーガレット嬢も私からの報告を待っているだろうし、早く依頼を達成したいね。



上層でのゴミ掃除<sup>そうじ</sup>を終えて、『ネームレス』ギルド本部にまで報告に来てみれば、孤児院の連中が立っていた。何日もそんなところに立っている暇があるなら、まじめに働けば良いのにと心底思った。

いや、少し雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気<sup>き</sup>が違うな。

『ネームレス』ギルド本部の入口のそばで、横一列に並んで情報提供を求めている。なんでも、募金活動に來た子供たちが謎の死を遂<sup>と</sup>げたらしい。ある者は、喉<sup>のど</sup>元<sup>もと</sup>を自<sup>じ</sup>ら<sup>ら</sup>かき<sup>む</sup>し<sup>て</sup>死亡<sup>し</sup>、ある者は溺<sup>で</sup>死<sup>し</sup>、ある者はバラバラにと、死に様<sup>さま</sup>は様々だが……一点だけ共通点があるらしい。冒険者に対して、不快な思いをさせてしまったらしいのだ。

それを聞けば納得の結果である。孤児たちの死に様<sup>さま</sup>と、起こった現場が『ネームレス』ギルド本部の目の前、さらに手を下<sup>くだ</sup>した瞬間を見た者が誰もいない——一流の冒険者の仕<sup>し</sup>業<sup>わざ</sup>であろう。

直感だが、溺<sup>で</sup>死<sup>し</sup>はジュラルド。バラバラにしたのは、エーテリアだろうね。ジュラルドの魔法ならば、誰にもバレることなく肺の中を水で満たすことも可能。エーテリアの剣技ならば、鋭さが異常だから、切られても数分は生きていることだってある。

あの二人も、ギルド孤児院の真の目的を読み取り、私と同じくゴミ掃除<sup>そうじ</sup>をしてあげたのだろう。まったく、紳士淑女は嫌な役回りをやらされることが多くて困るわ。

孤児たちが、死んだ友達だと思われる似顔絵を手にとって、情報提供を呼びかけている。ただ、